

修羅王

高木彬光

修羅王

高木彬光



青樹社刊

修 羅 王



昭和四十年七月二十日 印刷
昭和四十年七月二十五日 発行

定価三八〇円

著 者 高 木 彬 光

発行人 土 井 勇

印刷人 山 森 忠 一

発行所 有限青 樹 社

東京都千代田区神田三崎町二ノ三〇

電話 (261) 九七六六番

振替東京 四七六四八

弊丁・乱丁はお取替え致します

修羅王

目次

羽衣	五
修羅王の出	六
闇の御前	五
浪士横行図	六
青竜組	一〇〇
女人白道	二五

蠢く触手 一四〇

刺客西へ 一七〇

修羅道の恋 一九二

配所の客 二二五

京の時雨 二三八

道成寺 二六三

装幀 浜野政雄

羽衣

「いやあーッ！」

裂帛の気合とともに、小鼓が鳴つて、

「風むかう、雲の浮波立つと見て、雲の浮波立つと見て、釣せで人や帰るらん。待てしばし春ならば吹くものどけき朝風の……」

朗々たる地謡の声が、五色の揚幕をゆすぶり、この楽屋へと伝わつて来た。

天女の出にも、もはや寸前。

本来ならば、呼吸をこらし、針一本落しても聞えるほど、静まり返っているはずの、この楽屋にも、さつきから、何となくあわただしい空気がみなぎっている。

——若先生は？

——若先生は？

口にこそ出さね、思いは同じなのだ。今日関白の御前に於て、晴れの無台、羽衣のシテをつとめるべき、竜之助が、今なお姿をあらわさない。武士ならば、戦場を前にして、逃げ出したような不始末に、楽屋につめかけた金剛一門の人々が、何ともいえぬ不安に襲われたのも無理はない。

「面を、これへ！」

既に天女の衣裳をつけ、もしもの場合に備えていた後見役の金剛宗家、左近が鋭く声をかけた。冷たい汗を流しながら、その前ににじり出た門弟の手から、家宝の「僧」の面をうけとると、

「竜之助が万一参つたら申せ。今日かぎり、そなたは金剛家の者ではない——とな」

ただ一筋の芸に生き、芸を貫こうとする、この名人の気魄におされて、門弟がはつと飛びじさつて平伏したとき、面をつけ終つて立ち上つた左近は、一瞬に美しい天女の姿にかわつていた。

鳳凰の立物のついた天冠、長鬘、鬘帶、襟白、摺箔の着附、縫箔の腰巻——眼もあやな天女のようにおいに、宙を踏むような足どりで、さつと高くかかげられた五色の幕から橋掛りへ。

「のう、その衣は此方のにて候、何しに召され候ぞ」

「これは拾いたる衣にて候ほどに取りて帰り候よ」

「それは天人の羽衣とて、たやすく人間に与うべきものにあらず。もとの如くに置きたまえ」

辛うじて、舞台の穴のあくことだけは避けられた。能面の下にかくされたその顔は、竜之助のものか、その父左近のものか、誰にもわかりはしなはずだ。

「若先生はどうなすつたのだ？」

「一世一代のこの晴れの舞台に……」

「さつきまで、たしかお見うけしたという者があるのに……いつこへおいでなされたか」

「何にせよ、大先生の御気性から申せば、これはただごとではおさまりませうまい」

楽屋では、堰を切つたように、人々の口から、こんなささやきが奔つた。だが、橋掛二の松のあたりでは、それを知つてか知らぬにか、憂いに満ちた天女の声が流れていた。

「悲しやな、羽衣なくては飛行の道も絶え、天上に帰らんことも叶うまじ。さりとは返したびたまえ……」

「今はさながら天人も、羽なき鳥のごとくにて、上らんとすれば衣なし」

「地にまた住めば下界なり」

静々と舞台に進んで来る天女の朧たけた姿を見つめて、

「はて……」

関白、九条尚忠は、いぶかしげな視線を、傍に控えている側用人真間源太夫の方へむけた。

「源太夫、あのシテはたしかに竜之助か？」

「はは……」

「そうだとすれば大きいのう。芸が一廻り、ずーんと大きくなつた感じじや。だが、後見役の左近は舞台に出ておらぬ。彼はいつたいどうしたのじやな」

さすがに、自分でも金剛流の奥儀を極めているだけに、芸道にかけてはこの関白もただものではない。まるで素面であらわれたのを見るように、仮面の下の秘密を見やぶつて、鋭い言葉を投げかけ

た。

「はは、手前確かめて参りまする」

あわてて席を立つた源太夫が、正面の棧敷から膝行して、後の廊下へ歩み出たとき、脇正面の方から廊下へ、とび出して来た一人の女があつた。

一目見ただけで、奥方お附きの女中と知れる。色白の、瓜実顔の妙齡の娘——一枝という家中でも指折りの美女なのだ。

「一枝どの、いづれへ参られるな？」

源太夫の言葉にふりかえると、はツと狼狽の色を見せ、

「は……はい……」

「御能拜見の途中——しかも、羽衣の天女の出というに、浮かない顔色をしておるのう。気分でも悪いのかな」

「は……はい」

「まあ、朝から根をつめての拜見のこと……後は手前がよく申し上げておくゆえ、御部屋へ帰つてお休みなされ」

一枝のそばをすりぬけて、また楽屋の方へ歩み出た源太夫の袖をとらえて、

「御用人様、ちよつとお待ち下さいまし」

「何事じやな？」

「御用人様はこれから、楽屋へおいで遊ばすおつもりでございますか？ 御殿様の御意をうけて」

「左様、だが、何でそのようなことをたずねる？」

「それでは、御殿様にはやはり、あのシテを竜之助様ではないと御覧遊ばしたのでございますか？」

「はて、また何でそのようなことをきく？」

源太夫は思わず足をとめて、憂いに満ちた一枝の眼を見つめた。大粒の涙が臉をあふれ、柔かな頬に伝わった。

「そなた、泣いておられるな？」

「はい……」

舞台から、情に満ちたワキの音が、

「いかに申し候。御姿を見奉れば、あまりに御痛わしく候ほどに衣を返し申そうずるにて候……」

関白九条家の用人、たとえ腰に大小はたばきんでいても、酔いも甘いもかみわけた通人だけに、源太夫も一枝の心が察しられないこともなかつた。もともと、竜之助というのは父方からは金剛宗家の血をひき、母方からは祇園の名妓の血をひいて、水もしたたるような美男だし、この一枝も京の室町関白家お出入りの骨董商の娘だけに、こうして行儀見習いの御奉公に上るまでも、二人の間には何か親しい交渉があつたのではないかと思つた。

「そなたは童之助殿を知つておられるのか？」

「はい……」

「なるほどな。そなたと童之助殿となら……女夫雛でも見るような、いや似合いの夫婦になれるかも知らぬが……」

涙に濡れた頬をそめ、一枝は消えいりそうな声で、

「いいえ、そんな……そんな気持は毛頭ございません。ただ……ただ……子供のころからよく存じあげておりますので……」

「まあいい。この老人にも、若いおりはまんざらおぼえないことではない。御前態は、何とでもつくろつて進ぜようが、そなたも童之助殿のことが心配でもあろう。さ、いつしよに参られい」

先に立つて歩き出しながら、そつと後をふりかえつて見ると、やはり一枝は頭をたれたまま、自分の後について来る。自分の眼にも狂いはなかつたな——と源太夫は直感した。

楽屋口まで来て見ると、何となくあわただしいものが感じられる。

「これ……」

声をかけると、ふりかえつたのは、黒紋付に袴をつけた、元服のすんだかすまぬかという年ごろの美少年だつた。

「一枝どの……」

紅を塗つたような唇から、思わずその名をもらして一歩ふみ出したが、源太夫の顔を見てはつとしたのか、そのまま黙つて頭を下げた。

「新之助殿、兄者はいかがなされた？」

「はい……」

「いま、羽衣のシテをつとめておられるのは後見左近殿であろうな。いや万一、誰かが舞台で倒れても、直ちにその衣裳をつけ、面をつけて、代理をつとめるのは後見の心得——さもあるべきことは思うが、ただ、殿には大層御心配なされて、竜之助はいかががいたした。其方行つて見て参れとの仰せなのだ」

「は、はい」

「新之助様、竜之助様はいかが遊ばしましたか？」

一枝の言葉に、新之助も憂いに満ちた顔をあげて、

「兄はその……急の病いにござります。急のさしこみなどおこりまして……門弟一名をつきそわせ、ただいま御邸より立ち帰りました。このおわびは、父があらためて申し上げますゆえ、御前よしなおとりなしを……」

「病気……なるほど、急病とあらば大事にせねばなるまい。が……」

源太夫は傍の一枝の顔を見つめてはつとした。その顔は蠟を刻んだように白く、いまにも倒れそう

に、力を失つて、能面のあらゆる表情をかげにひそめた無表情に似ていた。

「いや、疑いは人間にあり、天に偽りなきものを……」

舞台からは、朗々たる左近の声が、四方を圧してひびいていた……

「春霞、たなびきにけり久方の、月の桂の花や咲く……」

もう大分酔つてはいるのだろう。手洗から出て来た童之助の足もとはふらふらしていた。手水鉢の柄杓を舞扇のように斜に構えて、ここがどこかわからぬ様子——年のころ、二十三四、白晳下ぶくれのふるいつきたいような美男子だが、その微吟の調子は何となく乱れている。

「どうなすつたの。いやな人、ここは橋掛りとは違いますよ」

障子を開いて、顔をのぞかせたのは、京には珍らしい、二十二三の粹な女だった。何となく齒切れのいい口調は、やつぱり江戸つ子の血をひいているせいだろう。童之助は、まだ酔顔朦朧たる恰好で「いかにこれなる狂女、おことの国里はいずこの者ぞ……」

「もうよして下さいな。人が見て、笑うじやありませんか」

童之助の手を捕えて、女は部屋の中へひきずりこんだ。もう、大分飲みつづけたあとなのだろう。料理の皿にもかなり箸がつき、銚子が十何本か行儀わるく並んでいる。

「ここはどこだ？ 関白様の能舞台か？」

やつと謡から、普通の言葉の調子にかえつて、竜之助があたりを見まわしはじめた。

「関白様ですつて？ ほほほ、とんでもない。ここは円山のお茶屋の百万」

「百万——といえば、狂女の名前だが、さてはそなたが？」

「わたしは気がいでも何でもございませぬ。お島——お島でございます。あなたこそ、どうなすつたのでござんすか。こんなに酔つぱらつたりなさつて」

「ははは、酔つたか。酔っているのか。お前にもそう見えるかな。いや、酔わずには、思いのたけも打ちあげきれぬ。拙者、こう見えても案外の小心で……はははは、幽玄とか物のあわれとか申すが、謡の文句には、女をくどくに役にたつようなものがないから……そなた、拙者を思つてくれるか？」

「ええ、ええ、三千世界にたつた一人の殿御と思いつめましたのさ。でも……」

「有難い。そなたの気持は、竜之助、あの世まで忘れはせぬ。さあ、三々九度の杯を」

竜之助のさし出した杯をうけとつたお島の手はふるえていた。

「あなたのお気持は、そりや身にしてみても嬉しうござんすが、あなたはいずれ由緒ある、金剛の御家をおつきなさるお方、わたしはこんな……」

「家をつぐような気持は毛頭ない。ははははは、そなたと添いとげたい一心から、勘当を覚悟で今日は関白様の舞台から逃げ出してやつて来たのだ」

「え……」

ポトリと、お鳥の手から、杯が落ちて金色の液体を、青い畳に吸いとらせていた。

「関白様の御能舞台のお開きは、今日だったのでございますか？」

「そうだ……」

「あなたはたしか、羽衣のシテをおつとめになられるはずでござんしたね。それを、わたしのために舞台に穴をお開けになつて……きついおとがめもかかりましょうに」

「ははははは、後見役の父がいる。ほかに門弟一同がいる。たとえ、いつ何時、どのような大役をおうせつけられようと、その場でつとめおわせるのが能楽師たる者の心得——心配するな。めつたなことで、舞台に穴は開きはせぬ」

「……」

お鳥は物もいえないように、ただ唇のあたりの筋肉をびくびく痙攣させていた。

「ははははは、そりやあ、室町幕府以来、代々伝わった由緒ある金剛の御家も大事には違いあるまいが——それ、猫に小判とか申すこともあるではないか。拙者のような男には、女の面をかぶつてそりそりりと、幽霊の化けそこなつた足どりで、橋がかりをひき下ることなどは、到底性にあわぬのだ。お前のことがないとしても、いづれは家をとび出して——とは思っていたのだが、ましてお前がいてくれれば、それ、君と寝ようか五千石とろか、何の五千石、君と寝よとかいう歌にもある通り」

「……」